

ハワイ神話の神々

About Hawaiian Gods and Goddesses

金成 陽一

KANARI Yoichi

要 旨

ハワイ神話に登場してくる多くの神々の中から、特に個性的な火の女神ペレと半神半人 (demigod) である英雄マウイについて考察した。また、類話として、ハワイに伝わる「梟の戦い」を紹介した。動物報恩譚として梟が登場してくる話は珍しいと思われる。

ハワイの神話には元々ハワイ諸島独自の神々が存在したわけではない。はるかな時代に移り住んだポリネシア人やミクロネシア人たちと一緒に神々もやって来たのである。ハワイ神話の特徴は他の地域に較べて神々の数が増えていることである。

ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアというこれら三つの文化圏と言語は、人々が移住を繰り返した結果、互いに複雑に影響しあっているのだ。

ニュージーランドの「天地の分離」神話は世界がどのようにして成立してきたかを人間に擬した神に置き換えて説明している。(もっとも、こうした未開人の天地分離神話はニュージーランドに限ったものではなく、アフリカや古代オリエント、古代ギリシャ「クロノス神話」、東南アジア等々広く分布している。)

マオリ族に伝わる「天地の分離」神話の粗筋は次のようだ。

世界のはじめにランギ (Rangi: 天空を擬人化したもの) がパパ (Papa: 大地を擬人化したもの) に恋をした。天にはまだ太陽も月も星もなく、世界は暗闇に支配されていた。ランギはパパを抱きしめ、いつまでもそうしていたので、二人から生まれた神々はその身体の暗い場所に挟まれて身動きもできず、そこで子供たちは「二人を殺してしまえ」と相談を始めるのである。「殺そう」と主張したのは一番凶悪なトゥ・マタウエンガ (Tu-matauenga) だが、森の神タネ・マフタ (Tane-mahuta)

は「親を殺すのはよくない。二人を引き離し、天をわれわれの上に、地を下に置こう」と言う。皆が賛成したものの、一人一人がいざ天地を引き離そうと試みても悉く失敗してしまう。最後にタネ・マフタが逆立ちをして大地パパの身体に頭をつけ、足を父なる天空ランギの身体に当てて、思い切り背伸びをすると、ランギとパパはやっと引き離され始めたのだった。

「どうしてお前は父と母を引き離すような恐ろしい罪を犯すのか」と両親が叫んでもタネ・マフタはその動きをやめようとはせず、こうして天と地は遠くに隔てられることになったのである。夜ごと天から降る露は、愛するパパを偲ぶランギの涙だという。

女性に擬人化した大地の母の名が「パパ」とは面白いけれど、元々ポリネシア神話では男性原理、女性原理どちらもパパという名称で呼ばれていたらしく、これらを区別するためにはパパの後に何らかの言葉を補っていたという。

ハワイ神話に登場してくるパパは最初の人間の女とされており、同じく天と地とを分離するのは英雄マウイである。人々が困っているところに通りかかったマウイは、女に水を飲ませてもらうと天を持ち上げてやったのだ。

ファンタジーに満ちてうまく体裁の整っているギリシャ神話に較べると、天のランギと大地のパパが抱き合っただけで子供が生まれるマオリ神話の方は、非常に荒削りな印象を受ける。

サモアやトンガ諸島では「原始の岩」から風や雲が湧き出して世界が始まり、その後天界の創造神タンガロア (Tangaloa) が活躍することになっている。

原始的なものから人間が出来あがり、神に助けられて進化するという神話はポリネシア西部の特徴のようだ。

創造主であるタンガロアもポリネシアの周辺部では大洋や漁師の神となり、ハワイの伝承ではカネとカナロアと呼ばれて、カヒキ (タヒチ) からやって来たと言われている。「男」を意味するカネは偉大な仕事を行い、女も創造している。この「生命を吹き込む特質」は、神話では「生命の水カネ」と呼ばれ、特にカヌーを作る大工はカネの加護を祈願するのだ。

ペレ

伝説によると、わがままな女神ペレは元々タヒチに住んでいたのだが、姉である海の女神ナマカとの確執から、カヌーでハワイのカウアイ島までやって来たのである。ペレは魔法の棒で穴を掘って火をつけたものの、すぐにナマカに見つけられ、海水で火を消されてしまう。ペレは隣のオアフ島へ逃げ、そこもナマカに見つかるので次にマウイ島へ、そして最後にハワイ島のキラウエア山に辿り着いた。海岸から遠いその場所へは海の女神ナマカの力も届かず、ペレはやっとここに安住の地を見出したのだという。

伝説の粗筋はこんな風だが、一説によればペレは姉ナマカの夫を寝取って追い出されたとも、洪水により押し流されたともいわれている。姉の夫を寝取って追われる女神とは何とも人間臭く、これな

らペレが必死に姉から逃げなければならぬ理由もわかってこようというものだ。

ギリシャ神話で夫を裏切って浮気をする女神アプロディテが思い出される。彼女はヘパイストスと結婚するとすぐに軍神アレスと密通を重ね、多くの子供まで産んでしまったのだ。怒ったヘパイストスが、二人が裸でベッドインしている時、上から目に見えない大きな網を落として捕らえ、他の男神たちを呼んで笑いものにした話はギリシャ神話の中でも滑稽で、またエロティックである。この後、解放されたアプロディテは、たちまち恥じて逃げ出していくのではあるが、しかし彼女はアレスだけに止まらず、その他多くの男神たちとも交わっている。ヘパイストスは、シチリア島のエトナ山やヴェスヴィオス山など火山のある地域で礼拝された火の神であり、活火山の炎の女神であるペレとそっくりなのが興味深い。

偉大なフラの歌に語られたペレの航海を、N・B・エマーソンが訳している⁽¹⁾。

フラ (hula) とは元々神々に捧げるダンスで、古典的スタイルはカヒコ、新しいスタイルはアウアナと呼ばれ、観光客の前などで踊ってはいけない神聖なフラが沢山あるという。フラはダンスを意味しているので、フラ・ダンスと言うと実は同語反復だから、最近は昔のように単にフラと呼ばれるようになってきている。やまと言葉同様、古代のハワイには文字がなかったので詳しい記録がなく、フラは恐らくタヒチあたりから伝えられたのだろうということ以外はよくわからないのだ。手の動きや足の動き、それに表情などで感情を表現するのがフラの真髄だという。

詩が表現しているのはもっぱら自然への讃歌である。あるいは自然と言う形で存在する神々への讃歌。ハワイの土地には、たとえ社会制度がどう変わろうとも、神々が生きている。彼らを楽しませるために人間は踊る。だから、踊りは厳密で、間違いは許されない。かつてタブー制度がきちんとしていた時代には、踊りを間違えた者が死をもって罰されたことさえあったという。ここでは踊りは暇つぶしや遊びではなく、宗教的な意味を帯びた大事な行いだった⁽²⁾。

女神ペレは大空の南の果てにあるハバクエラという国に住んでいたという類話もある。

ペレはある若者と結婚したのだが、しばらくすると彼は彼女を捨てて別の乙女とどこかへ行ってしまった。悲しんだペレは、夫を探すべくあてない旅に出る。面白いのはこの時、両親が彼女に「何かのためになるかもしれない」と言って、「海」を与えたことである。ペレは海を自分の頭に載せてハワイへと行き、まだ海というものがなかったそのあたりの荒野は、彼女の頭の海からしたたる大水のおかげで、ハレアカラやマウナ・ケア、マウナ・ロアといった高い山の頂以外は埋没してしまった。今日のようにいろんな島が現れたのは、しばらくして水が引いた後のことだという。ハワイ・ネイに着いたペレはまずカウアイ島に住み、やがてモロカイ島のカウハコの噴火口、そしてプウライナ、最後にハワイ島キラウエアに噴火口を作って長く留まったのであった。

この神話はペレを捨てた夫がその後どうなったのか、ペレは結局夫と再会したのかしなかったのか等々の結末がわからず、中途半端で終わっている。しかし女神ペレの移り住んだ島の順序はハワイの火山活動と一致しており、こうしたことを説明する一種の推原論的神話 (aetiologica myth) と言うべきものである。(T.G.Thrum: Hawaiian Folk Tales)

海を頭に載せてハワイへやって来たペレのおかげで、高い山以外すべて埋没してしまったというのも、恐らく昔起こった大洪水という事実が伝説化したとは十分に考えられる。様々な調査によって、遙かな昔に信じられないような規模の洪水があったことが裏付けられており、有名な「ノアの箱舟」によれば、このときの雨は四十日四十夜降り続けたのだ。

聖書のこの洪水物語の更に古い原型は「ギルガメシュ叙事詩」のウトナピシュティム（「生命を見た者」の意）で、彼こそは大洪水に生き残った聖書のノアに当たる人物なのである。

人々が視界に入ることもない海の彼方の陸地を求めて船出していった理由は、単なる冒険心や好奇心だけではなかつただろう。恐らく、その土地（島）にいたたまれなくなってしまったほどの喧嘩やいじめ、更には大きな争いごとや戦等々、命にかかわる危険から彼らは海に出て行かざるを得なかつたのではあるまいか。そして新しい島や陸地に辿り着くまでには多くの餓死者や溺死者、果ては日射病にかかった者たちもいたに違いない。タヒチに住んでいた女神ペレが、姉ナマカの怒りからハワイ諸島へと逃げ出して来た神話も、大昔のこうした様々な出来事の結果生まれてきたものだろう。

神話によればペレはお気に入りの住まいを二つ持っていたという。一つはマウナ・ロアの頂上でモクアヴェオオと呼ばれ、もう一つはハレマウマウというキラウエアの炎のくぼみであった。ペレは時々、醜い老婆の姿となって食べ物と保護を求めながら、海岸線を彷徨っていたと神話は伝えている。もし住民たちが利己的で彼女のこうした願いを拒絶したなら、ペレは溶岩の流れを引き起こし彼らの家や庭を破壊したが、しかし善良で親切な人々には祝福を送り、沢山の食物と幸運、そして長寿を与えたのである。

似たような女性の性格ですぐに思い浮かぶのは、ドイツ・ヘッセン地方に伝わるホッレおばさんである。伝説によればヘッセンのホッレ小母が池 (Frau Hollen Teich) に住む彼女は、泉の底に降りて自分のところに詣でる女たちには健康を恵み子宝を授けるのだ。グリム童話「ホレおばさん」(Frau Holle: KHM 7) によれば、人の世に雪が降るのは、ホレおばさんが布団を叩いてその綿屑が空中を舞うからだという。紡ぎ女が怠けていると小母は糸巻き棒を汚したり、^{よりいと}縫糸をもつれさせたり、亜麻に火をつけたりして女を懲らしめる。小母はまた池の底に花や果物を貯え、気に入った人間に出会うとそれを分け与えていた。ペレもホッレ小母も、産み育てる肯定的な面と、破壊しようとする否定的な面とを併せ持つグレート・マザー (太母) 的な性格はよく似ている。また、ホッレ小母は水の底、ペレがドロドロした溶岩の底に住んでいるのも共通している⁽³⁾。

更に、凄まじい勢いで流れ出る溶岩の活動を、女神ペレの恐ろしさに置き換えて伝えている物語も

ある。

海に向かって大きな石や岩を投げるペレの姿は、ギリシャ神話の中でオデュッセウスに目をつぶされて怒り狂いながら岩を引きちぎって船に投げつけた一眼巨人キュクロプスの姿を髣髴とさせる。

要するに火山の凄まじい噴火の様子を、昔の人々は火の女神ペレや恐ろしい巨人の姿に移し変えて伝えてきたのだろう。ペレはキラウエア火山だし、キュクロプスの場合はシシリー島のエトナ火山がモデルではないかといわれている。

家族思いのペレも人間から見れば、実に気まぐれで怒りやすい恐ろしい神だ。

ペレがいつ暴れ出すか、つまりいつ火山が噴火して溶岩が流れ出すかなど、ちっぽけな人間には予測も出来なかったし、ペレに対する恐れはすなわちすぐに大自然への脅威に直結していたのである。

マウナ・ケアの雪の女神はポリアフである。彼女とペレとの女神同士が戦う神話は、いつもポリアフが辛勝しているけれど、これは火と水（雪）では当然水が勝るといことなのかもしれない。

類話

「梟の戦い」（「オーストラリア・ポリネシアの神話伝説」名著普及会）という古い話は、ハワイの人々がこの鳥をどのように見ていたのかを示していて興味深い。

助けられた梟が恩返しをするこの話は、所謂「動物報恩譚」の一種である。しかし、動物の援助（報恩）によって豊かな富をもたらされた主人公が最後に大金持になって終る昔話の多い中で、この話は主人公カポイの命が救われ、人々が梟を神として崇めるようになったという単純な結末になっている。

「舌切り雀」や「花咲翁」、「浦島太郎」などよく知られた日本昔話でも、やはり鳥獣救助のモチーフに応じて物語が展開していた。昔の人々にとって自然界の動物は今よりもっと身近であったに違いなく、人々は何かの切掛けがあれば動物が自分たちに富をもたらしてくれると考えていたのではあるまいか。

元来、死と関連を持つ夜の鳥である梟は、西洋の民間伝承でその羽が魔女の煮物の具に使われたりするのだ。梟（owl）は知恵の鳥であり、また同時に闇と死の鳥といった両面性を持つ。どの民族でも梟が死に関連しているのは、夜行性と肉食の習性などから、こうしたイメージが形成されたのかもしれない。

梟の戦い

ホノルルのカヘフナに住むカポイ（Kapoï）が梟の卵を見つけ、それを持ち帰って焼こうとした。すると、垣根にとまっていた一羽の梟が、

「カポイ、カポイ、私の卵を返しておくれ」

といった。

「そんなに卵が欲しいなら、自分でとりに来たらいいだろう」

とカポイがいうと、梟は喜んで家の中に入って、自分の卵を受け取った。そしてお礼に、
「お宮を建てて、マヌア (Manua) と名をつけ、毎日祭壇の上に供物を捧げなさい。そうすると長生きをするから」
と教えてくれた。

カポイは教わった通りにした。するとオアフの王様が、その噂を聞いてひどく腹を立て、すぐに家来たちに命じてカポイを捕えさせ、日を改めて彼を死刑に処することにしたのだ。

これを聞き込んだ例の梟は、島中を飛び回って、梟の仲間を呼び集めた。

処刑の日の夜も明けきらぬうちに、夥しい梟が、ホノルルの空を覆い尽くすほど飛び出した。王様の家来たちがうっかり空を仰ぐと、梟どもがさっと舞い降りて来て、鋭い嘴を揃えて、彼らの顔を突つき始めた。家来たちはびっくりしながらも、懸命に梟と戦ったのだがとうとう打ち負かされて、カポイを残して、ほうほうの体で逃げ去ってしまった。

それ以来、ハワイの人たちは、梟を神として崇め尊ぶようになったのである。

(ハワイ・抄訳)

梟が死者を蘇らせる「無実の罪」という、もう一つのハワイの物語がある。しかし、ここで恋人に殺されてしまった驚くほど美しい女カハラオプナ (Kahalaopuna) には何の救いもなく、少しばかり後味の悪い結末となっている。

冥界に妻を迎えに行ったギリシャ神話のオルフェウス (Orpheus) や、黄泉の国へ行く日本神話のイザナギに似た話がハワイにもある。

伝説によればオルフェウスは素晴らしい音楽家で、木や石でさえ彼の音楽を聴きにやって来たという。妻エウリュディケが蛇にかまれて死んでしまった後、悲しみに襲われた彼はラコニアのタイナロンというところから冥界に下りていくのだ。

彼の音楽によって、黄泉の国の亡霊たちは恍惚となり、ハデスやペルセポネですら気持を和ませた。彼らは彼に好意を示し、ある一つの条件を付けてエウリュディケを連れ帰らせてやろうとした。それは、オルフェウスが先に道を進み、二人が地上に戻り着くまでは決して振り返ってエウリュディケを見てはならない、というものだった⁽⁴⁾。

オルフェウスが我慢できずに振り返って、妻の顔を見てしまうのも「禁止の魔力」という訳だろう。その結果、彼女は霞の精霊と化し、ハデスの館へとかき消えてしまったのである。

日本のイザナギ・イザナミ神話でも、黄泉の国へ行った夫はやはり妻を連れ帰るのに失敗しているのだが、このハワイの物語「椰子の殻に詰めた靈魂」は見事に成功しているのが面白い。

ヒクという若者がカウエルという乙女と恋仲になり、夫婦になった。

しかし、ある時、彼は自分の母に会いに行き、なかなか戻ってこなかった。

愛人にとり残されたカウエルは、寂しさと悲しさとのあまり、重い病にかかってしまう。その便りを聞いたヒクは、大急ぎで村に帰ってきたものの、彼女は冷たい^{しかばね}屍となっていた。

ヒクは悲しくて、カウエルの靈魂を冥府から連れ帰ろうと決心しました。

彼は、村の人たちに加勢をしてもらって長い綱をこしらえ、それから体中にいやなにおいのする油を塗って、空洞^{うつつろ}になった椰子の実を持って、冥府へと旅立ちました。

人間界から冥府に通ずる深い穴の所に来ますと、長い綱を垂らして、それを伝って冥府に降りてきました。冥府の者どもは、生きた人間がやって来たと思って、みんなそのそばに集まって来ましたが、いやに臭いにおいがするので、

「やあ、死人だ、死人だ。もう腐れかけている」

と、一人も^{とが}咎め立てをするものがありませんでした。冥府の王ミル（Miru）さえも騙されて、何ともいいませんでした。

ヒクは人間界から垂れ下がっている長い綱の端につかまって、さも面白そうに揺れました。死人たちはそれを見ると、みんなが代わる代わる綱につかまって、ぶらんこをしました。と、ヒクの妻カウエルも堪りかねて、そこに駆け寄って来ました。そして夫に声をかけて、

「ねえ、あなた、私も揺れてみたいわ」

と、ヒクは妻と一緒に綱の端にぶら下がりました。そして、ヒクがぐいと綱を引っ張り、人間界で綱を支えていた人々は、

「それ、合図があったぞ。早く引き上げろ」

と、ぐんぐん綱を手繰り、ヒクとカウエルとは素早く上の方に昇って行きました。冥府の者どもは、騙されたと大騒ぎをしましたが、どうにもしようがありませんでした。

カウエルは、夫の計略に気がつくや、たちまち蝶に姿を変えて逃げ出そうとしましたが、ヒクは素早く蝶を捕えて、持ってきた椰子の殻に放り込みました。そのうちに綱が手繰りつくされて、人間界に達しましたので、ヒクはすぐにカウエルの亡骸のそばに駆け寄って、左足の親指に孔を開けて、いやがるカウエルの靈魂をそこから体の中に押し込みました。すると、亡骸が急に動き出して、カウエルが生き返りました⁽⁵⁾。(ハワイ)

ヒクがカウエルから去ろうとするのは、竜宮城にいた浦島が乙姫の許を離れようとするのとそっくりである。しかもその理由たるや、どちらも「母に会いたい」といったものなのである。違っているのは、乙姫が男に玉手箱という「禁止の魔力」を伴った完全犯罪の道具を渡したのに対して、純情な乙女カウエルは「寂しさと悲しさ」のあまり病にかかって死んでしまう点だ。自分を裏切ろうとする

男を絶対に許さない乙姫と、あくまで受身で優しいカウエルと、どちらもとてもせつないのだ。

自分のせいで人に死なれるよりは、究極のところ、むしろ自分が死ぬほうが気は楽なのではないか。「おぬしはカウエルさんを殺したようなものだ」という村人たちの責めは、ずっしりと重たくヒクの心に突き刺さっていたに違いない。だからこそ彼は冥府へと出かけていったのだろう。

人間界と深い穴で繋がっている冥府へと、ヒクは嫌な臭いの油を塗って下りていった。南国では死体が腐臭を発するのも早いだろうし、彼はなかなか抜け目がないといえる。日本神話でも、妻のイザナミに「私の姿をご覧にならないで」と言われたイザナギが禁を破って覗き、目にしたのは彼女の腐乱死体であった。

ヒクが冥府へ持っていく椰子の実は、後で蝶に変身したカウエルを入れる道具として役立つことになるのだが、「生命の木」である椰子は自己再生のシンボルとしては最も相応しく、「黙示録」にも死に打ち勝ち、永遠の幸福に至る木として登場してくる。

その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから数えきれないほどの大ぜいの群集が、白い衣を身にまとい、棕櫚（椰子）の枝を手にとって、御座と子羊との前に立ち、大声で叫んで言った。

「救いは御座にいますわれらの神と子羊からきたる」⁽⁶⁾

最後にヒクの計略に気づいたカウエルは、たちまち蝶に姿を変えて逃げ出そうとするが、この場面は蝶が魂と同時にまた死をも表している点を考えてみると非常に暗示的である。オビディウスによれば蝶は葬儀と関連し時に墓石に彫られるというから、冥界の生き物としては相応しいのだ。

この荒削りの物語は、恐らくいくつかの話が合わさって出来ているのだろう。男に去られた女が寂しさのあまり病気になって死んでしまったという哀れな話が前半で、後半は、それを聞いて大いに後悔した男が冥界へと下りて行く冒険譚である。この冥界も、日本の我々が想像する黄泉の国や、ギリシャ神話やダンテの世界等とは大いに違って、まるで子供のお遊戯のように単純に描かれている。しかし、読み終えて、カウエルに対するヒクの愛情が伝わってはくるものの、果たして彼女が再び前と同じように彼に心を開いたのかどうかはよくわからないのだ。

南方の島で、現世と来世を結びつけるのに特に好まれたのは椰子の実である。何処か遠くから流れ着く椰子の実には、人の心を見知らぬ別の世界へと導いて行く不思議な雰囲気秘められていたのかもしれない。（藤村の詩も思い出される）。

このハワイ神話「椰子の殻に詰めた靈魂」の元は、マオリの「パレの物語」である。恋人フトゥに去られたパレは首を吊り、ポ（地下世界のこと）へと降りて行ってしまった。しかし、まだパレを愛していたフトゥはヒナの力を借りて地下世界へパレを追って行き、木をたわわせたブランコで新しい

遊びを考え出している⁽⁷⁾。

マウイ

マウイと同格の神はミクロネシアやメラネシアでも知られており、南太平洋ではタンガロアと並び最も原型的な神といえよう。彼はハワイでは『クムリポ』の神代末に現われる半神 (demigod) であり、文化英雄あるいはトリックスターとされる。マウイとは個人名というより兄弟の総称なのだが活躍するのはその末っ子である。マウイは兄たちと釣りをしていたとき魔法の釣り針で大きな魚を釣る。すると海の底が動きだし、大きな波が起こった。二日間、大魚と格闘したマウイは、兄たちにカヌーを漕いで魚を岸に近づけるようお願いして、決して振り向かないように言ったのだが、しかし兄の一人が振り向いてしまったのだ。すると釣り糸が切れて、浮上していた魚は島になった。それがハワイの島々なのである⁽⁸⁾。

別な類話で、マウイの釣り上げるのは巨大な魚である。

「その(魚の)背には偉大な神タンガロアの孫息子の家があり、釣針はその家の屋根の破風に掛かっていた。魚の上では火が燃え、人々が歩きまわっていた」⁽⁹⁾。こちらの話では、兄たちが警告を無視して魚(陸地)に切りつけたのは、巨大魚を釣り上げた赦しを得るためにマウイがタンガロアに供え物をしに出かけていた間ということになっている。もし兄たちがマウイの警告に従っていたなら、恐らくニュージーランドは平坦な陸地のままであっただろうというのだ。

ハワイ神話では、マウイ島に住んでいたマウイが、やはり魔法の釣り針で大魚を釣り上げようとする。彼は兄たちにカヌーを漕いで魚を岸に引っ張って欲しいと願うと同時に、決して後ろを振り返ってはならないと言うのだが、しかし兄の一人が振り向いてしまうのは「ココナツアイランド」⁽¹⁰⁾の話と同じ。「島釣り神話」の場合は、釣り糸が切れて、浮上していた魚が島になる。これらの話は、島や陸地をまるで生きていく如くに擬人化しているのが面白い。考えてみれば地球そのものもまた大きな一つの生命体であり、誕生していつかは滅亡していく存在ではないか。活火山からドロドロと流れ出る溶岩流など、まさに赤い血液のようでもある。

「クムリポ」に出てくるマウイの島釣りは、2010行から20行ほどである。

「起源」を意味するハワイ語である「クムリポ (Kumulipo) とはハワイ王家の壮大な創世神話で、文字がなかったハワイで、口から口へと代々伝えられてきたものである。1887年に第7代の王カラカウアが書き記し、彼の妹リリウオカラニによって英訳された。彼女はハワイ王国8代目の女王であり、有名な「アロハ・オエ」の歌も彼女の作なのである。こうした動きは、19世紀になってヨーロッパ人たちが次々とポリネシアへやって来たことが引き金となり、読み書きを覚えた何人かのハワイ島民は「自分たちの言語で書かれた新聞の中で、彼らの神々や英雄たちの行動がモデルである多くのロマン

ティックな物語を発行し始めた」(「オセアニア神話」)のである。

権力を持った者が正当性を誇示するために、自分と神とを結びつけるのは古来どの国でもよく行われてきたことなのだろうが、しかしそれでも尚やはり国王自身が創世神話を記録に留めたのは素晴らしいことではないだろうか。たとえ自慢話であったとしても、記録がなければ全ては不明のままなのだから。

マウイと太陽

山々の真ん中にある巨大な噴火口の中で、軽い雲に覆われた太陽は横になってぐっすり眠っていた。あたりを見回していたマウイは細道の近くに洞窟を見つけ、その中に潜んで、太陽が目覚めた後に朝空を横切っていくのを観察することにした。太陽の脚は一本だけ他のに較べてずっと長く、これが日の出の最初の光線なのである。

間もなく昇り始めた太陽は、自分の軌道をどんどん転がっていった。マウイは隠れていた場所から飛び出すと、投げ縄をまわして、すぐさま太陽の長くて早い脚を捕まえたのである。

「お前はヒナに合わせてゆっくり動くのだ。長く明るい昼間、あまり暑く輝いてはいけない」

「わかった。わかった。私を自由にしてくれるのなら約束しよう。」と太陽は彼に頼むのであった。

そして、太陽は一年のうち六ヶ月はゆっくり歩き、残りの六ヶ月は急いで行くということになったのである。マウイはこの良い知らせを持って母の所へ戻った⁽¹¹⁾。

英雄マウイが太陽を捕まえる話はいくつかのバリエーションがあるものの、おおよその筋は以上のようなものである。太陽を捕まえて殴りつけ、言う事を聞かせようというスケールの大きな発想は何とも面白い。ここには、意のままにならぬ大自然の活動を何とかして支配したいという古代人の願望が潜んでいるのではあるまいか。

もう一つ、マウイ自身が「太陽の動きが早すぎる」と考える話もある。「太陽のラが、あまりにも早く空を通り過ぎてしまうため、昼が短くて不便」なのだ。そこでマウイは兄たちと頑丈なロープを作って、朝、太陽が昇ってくる岩屋に罫を仕掛けたのである。ところが、強烈な熱で罫は一瞬で燃え上がり、ラはさっさと高く昇って行ってしまふ。失敗して教訓を得たマウイは、尻込みする兄たちを励まし、今度は緑色の亜麻を何重にも捩じり合わせて、強力なロープを完成させたのだ。今度は流石のラも捕えられて、地面の上で身動きができなくなってしまった。マウイはラに跳びかかって、祖母ムリランガの顎の骨で散々にぶん殴ったのである。

古代ギリシャ人が、太陽をアポロやヘリオスといった人の姿に似た神々に見立てたように、ハワイでも太陽を人と同じサイズにして擬人化したというわけだ。四頭立ての火の車を駆る御者ヘリオスが、曙の女神エオスに先導されて東から天空を横切り、西に沈むとされているギリシャ神話はとてもロマ

ンチックだが、これに較べてマウイの話は荒っぽく、あまり洗練されているとは言いがたい素朴なものである。

次に、前の話よりは大分簡潔になっているマウイが太陽を縛る類話を見てみよう。

お祖母さんはマウイに魔法の棒をくれました。

マウイは綱と棒とを持って東へ東へと歩き、太陽が下界から昇ってくる所に綱でこしらえた罟を張って置きました。太陽は二本の脚を罟にとられて、懸命に身をもがきました。マウイは、素早く太陽を縛り上げて大きな樹に繋ぎ、魔法の棒を振り上げて力任せに殴り続けたので、さすがの太陽も堪りかねて、

「命ばかりは助けておくれ」

と頼みました。

「お前の足が速すぎる。もっとゆっくり歩くなら許してやろう」

とマウイがいました。太陽がゆっくり歩くと誓ったので、マウイはやっと太陽を解放してやりました。この時から太陽は、ゆっくり空を歩くようになりました。

マウイのお祖母さんが登場してくるこの類話からは、メドゥサ退治に行く際、老婆グライアイを訪ねるペルセウスの姿がだぶってくる。近くにいたニンフたちは彼に、「かぶると身体が見えなくなる帽子」「翼のある一足の靴」「メドゥサの頭を入れる袋」をプレゼントしてくれたのであった。

祖父母の孫に対する感覚は、一種独特のものがあるということも考慮すべきだろう。特に、祖父と女の子、そして祖母と男の子の関係は場合によって、親子の絆をはるかに超えてしまうことだって大いに有りうるのだ。神話やメルヘンには、こうした人間の持つ普遍の感情が至るところに凝縮されているのである。

オリュンポスあるいはヘパイストスの鍛冶場から、密かにウイキョウの茎の中に火を隠して人間に与えたのはギリシャ神話のプロメテウスであった。彼は、ゼウスによって罰せられたというのに、水鶏を脅して火を起こす秘密を聞き出したマウイは何の罰も受けてはいない。ここには人間の幸せのための行為が罪に問われた時、果たしてそれは償われるべきか否かについて、西洋と東洋（ハワイを含めて）の考え方の違いがあるのかもしれない。

理由の如何にかかわらず、罪は罪として償わねばならぬというのが厳格な西洋流の掟で、だからこそプロメテウスは毎日大鷲に肝臓をついばまれることになったのである。マウイが一切こうした罰を受けることがなかったのも、罪と罰に対するアジア的な曖昧さが根底にあるような気がするのだ。ましてや彼の行為は人類の幸せに大いに貢献したのであるから、尚更である。

それにしても水鶏から火の起こし方を教わるマウイとは、いかにも南の島の話ではある。

太陽を捕まえたり、人間に火をもたらしたりした半神半人のマウイは英雄というよりは、むしろ悪戯好きでユーモアのあるトリックスター (trickster) なのだろう。彼はクヨクヨ迷ったり悩んだりすることなく、思ったことをすぐ実行に移していくマッチョな男 (macho man) なのだ。その単純で一途な性格こそ、彼が人々に好まれる一番大きな理由なのではあるまいか。ギリシャ神話最大の英雄であるヘラクレスにはどことなく陰の部分が感じられるけれど、マウイの方はどこまでも明るいのである。しかし、どちらの英雄も最後は、本当にあっけないほど簡単に死んでしまうのだ。

ヘラクレスは赤子の時、既に二匹の蛇を絞め殺している。青年になってからは、家畜を荒らすライオンを素手で殺したり、デルポイの巫女に命じられた十二の難業でも様々な怪物を退治したりしている。しかし、妻デアネラはヘラクレスが故郷に戻った時、夫の愛を疑って、怪物ネソスからもらった血を晴着に浸しておいたのだ。ネソスは、その血には夫を繋ぎとめる不思議な力があると言って彼女を騙したのである。実はそれは猛毒だった。

様々な冒険を果たしていたマウイはどうだっただろう。

ある時、彼は人間のために永遠の生を願ったことがあった。しかし父は、「死の女神ヒネ・ヌイ・テ・ポに勝つことはできぬ」と言って、彼にその無謀な計画をやめさせようとした。女神の瞳は碧玉、髪は海藻で、鱗の口を持ち、その歯は黒曜石のように鋭いのだという。

それでもマウイは、恐ろしい女神ヒネ・ヌイ・テ・ポに勝って、人々から死の定めを取り去るべく、「天と地の出会う果て」へと出かけていったのである。お伴についてきた森の小鳥たちにマウイは、「眠っている女神の体内に僕が入り込んでいる間、絶対に笑ってはいけないぞ」と注意していた。「もし僕の身体が無事に通り抜けられたなら、女神は死に、人間は永遠の生を得られるようになるのだから」。

死の女神が眠っているところに着くと、マウイは裸体になって、ムリランガの顎の骨を持ち、小鳥たちにもう一度さっきの注意をくり返してから、女神の股間から体内に這いこみ、顎の骨で道を切り開き進んで行った。そのあいだ鳥たちは、彼が滑稽に体をくねらせるのを見ながら、懸命に笑いをこらえていたが、彼が女神の喉まで達したときに、クジャクバトがついにおかしさを我慢できなくなって、けたたましい声で笑い出してしまった。そうするとヒネ・ヌイ・テ・ポは、たちまち目を覚まして口を閉じ、マウイを二つに噛み切って飲みこんだので、彼は死に、人間を不死にしようとした彼の企ては失敗に終わった。

半神半人のマウイの人気は神としての崇拜というよりは、やはりその勇敢さと単純さにあるのではないだろうか。母のために太陽の進みを遅らせ、人間のために火を与え、そして最後には人間のために死んでいくマウイのどこまでも一本気で純粋な行動力に人々は称賛を惜しまないのだ。マウイが人間に不死をもたらすことに失敗した結果、人間の魂は死んだ後、肉体を離れて霊の世界へ入っていく

ことになったのである。その入口は仏教の西方浄土の如く西にあって、特別な木が生えていると人々は考えていた。

ハワイの人々はそれを「静かに招くパンノキ」と呼び、小さい子供たちの魂がそばにいて死者の道案内をすと言っている⁽¹²⁾。

ハワイではまた、「アムマクア」という守護霊が魂のもとを訪れて死後の旅の危険から魂を守ってくれると信じられてもいた。

時としてアムマクアは高貴な人の魂を歓迎するために大挙して訪れ、多くのハワイの人々が葬儀の夜の行進の斉唱や甲高く響く横笛の音色を耳にしたことがあるという。もし実際にその行進に出くわした場合、とるべき最善の策は、衣服をすべて脱いで仰向けに横たわり寝たふりをする事だと言われている⁽¹³⁾。

註

(1) カヒキ (タヒチ) からその女ベレはやって来た。

ボラボラ (ボラボラ島) の地より

カネの赤い雲より

天空にたなびく雲より

カヒキのきらきら光る雲の柱より

ハワイへの熱い思いがベレをかき立てた。

ベレはカヌーを削り出す、ホヌア・イア・ケア、

貴女のカヌーは、嗚呼、カモホアライ、

みなは完成に向け、仕事を急ぐ、

神のカヌーにむちがあてられ、

カネのカヌー、カネは世界の創造主。

(「オセアニア神話」青土社。1993年)

(2) 「ハワイ紀行」池澤夏樹。新潮社。1996年。

(3) 池は古代の諸宗教では常に女性を表す象徴であり、しばしば地下の子宮への水路と見なされたが、この子宮は北歐では太母ヘル (Hel) と関係があった。Hel という語から holy (聖なる) と healing (病を癒す) が派生したのである。ヘル (Hel) はホッレ (Holle) であり、その水は「地上のすべての子の源」と呼ばれているから、こんなこともグリム童話で「ホレおばさん」(Frau Holle : KHM24) と呼ばれるドイツの魔女たちが、水底に住んでいた理由に繋がっているのかもしれない。(拙著「まだあるグリムの怖い話」)

(4) 「ギリシャ・ローマ事典」マイケル・グラント、他。西田実、他訳。大修館書店。1988年

(5) 「オーストラリア・ポリネシアの神話伝説」松村武雄編。名著普及会。1928年。

(6) 「ヨハネの黙示録」第7章9節

(7) パレはついに我慢しきれなくなって、一緒にこの遊びを始めた。二人は一緒になって高く高くこぎ、ついにフトゥはポの入口に生えている植物の根をつかむことができて、パレとともによじ登ってこの世の光の世界へ

と戻ったのである。フトゥはパレの肉体に、その魂を足の裏から入れ戻した。(ポインヤント「ポリネシア神話」青土社。1993年)

(8)「カメハメハ大王 ハワイの神話と歴史」後藤明。勉誠出版。2008年

(9)「世界の神話101」吉田敦彦編。新書館。2000年。

(10) Hilo Legends

(11) (10) と同書。

(12) (1) と同書。

(13) (1) と同書。

参考文献

○「バプアの民話」(付フィジーの民話) アニー・カー。山下欣一訳。大日本絵画巧美術株式会社。昭和55年。

○世界神話伝体系21「オーストラリア。ポリネシアの神話伝説」編者・村松武雄。名著普及会。1928年。

○「オセアニア神話」ロズリン・ポインヤント。豊田由貴夫訳。青土社。1993年

○「ハワイ紀行」池澤夏樹。新潮社。1996年。

○「ハワイ・南太平洋の神話」後藤明。中公新書。1997年。

○「南島の神話」後藤明。中公文庫。2002年。

○「ハワイ島」(地球の歩き方)。ダイヤモンド社。1997年。

○「ヨーロッパの神話」ジャクリン・シンプソン。橋本楨矩訳。青土社。1991年。

○「世界の神話をどう読むか」大林太良+吉田敦彦。青土社。1998年。

○「神話と近親相姦」吉田敦彦。青土社。1993年。

○「日本神話の源流」吉田敦彦。講談社学術文庫1820。2007年。

○「神話の系譜」大林太良。講談社学術文庫957。一九九一年。

○Hilo Legends. Frances Reed. Petroglyph Press, LTD. 1987.

○「世界の神話101」吉田敦彦編。

○More Hawaiian Folktales : Thomas G. Thrum : A.C.McClurg. 1923.

○Walter Scherf : Lexikon der Zaubermärchen : Alfred Körner Verlag.Stuttgart. 1982.

○Brüder Grimm : Kinder-und Hausmärchen : Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1980.

○Brüder Grimm : Deutsche Sagen : Winkler Verlag. München. 1956.